
王様と喪女

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女

【Nコード】

N0653BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることだけが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとって結婚しろとはるかに迫るが……？

よし、これが打ち終わったら、すぐに家に直帰するぞ。

わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の二割り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、よく言えばナチュラルメイク。

一応手入れはしているけど、眉も描いていないという手抜きぶり。髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめたただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだというのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、つけまつげバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味か睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとつても垢抜けなかった。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太って見られるし、服選びは大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがったら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、ごめんなさい。今日は用があつて無理なんです。すみません」

ちょうど金曜日の仕事上がり前ということもあつて、会社の営業の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗りのしないわたしはせっかくのお誘いを断ってしまった。……本当は大した用は

ないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言うてくるけど、たぶん内心では気を悪くしているだろう。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知っている。

「あの子もこんな機会でもなきや、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからいい付き合いができるかもしれないしね」
うっかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を淹れている時に、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人に話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人わたし胸が大きいのが気に入ったらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会った方がいいのかもしれないけど、接待とか苦手だし。わたしにはお茶出しとかがせいぜいだ。

それに、お酒の席とかでごまかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人にうまく対応できるとも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちよっと、いやかなりへこむかもしれない。

それでもって、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけだ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしれないけ

れど、それは仕事の方で挽回することにしよう。

わたしは渋る相田さんに謝り倒してなんとか飲み会は回避することに成功した。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」

相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにした。

これは何度もいろんな人に言われていることだったからだ。

確かにわたしには恋人はいない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。

いわゆるもてない女 喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思う。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないことはなかった。

今までに異性を紹介してくる相田さんみたいな人もいたし、知り合いや親に婚活を勧められたりした。

でも、わたしにはめんどくさい男女の関係よりも、もっと大事なことがあったのだ。

「よし、下描きまでは完成ーっ」と

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらってOKが出たところで、脇目もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下描きが予定したところまで終わりそうだったからだ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろしかったので、その事に浮かれ気味だった。

これなら早めにサイトに載せられそうだし、気の乗らない飲み会

よりは、時間の過ごし方としてはやっぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。そんな自信もなかったし、ウエブ経由でいるいろんな人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけれどね。

「しかし、さすがに肩こつたなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下描きまで終わった原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめると、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じゃないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしれないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いつてえ〜っ!」

二十七の女の叫び声として、これはどうかと思うが、本当に痛いではない。

人間、とっさの時にはつい地が出てしまうものだ。

だが、原稿一式は死守。

どうあっても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうにか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまつてあるし、あんなふうには散らばることはないはずなのに。

「……おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさるうとした。……がなんだこれ。

「おい、やめろ！」

なぜかいかにも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

どこだ、ここは。

さっきまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、こっちはそれどころじゃなかった。

「いつたい、なに？　なにが起こったの？」

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動してくるなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うのなら海外とかにテレポート？

もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリックプってやつですか！？

高価そうな馬鹿でかい机の上からとりあえず降ろされたわたしは、目の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法って言葉が出たってことは、やっぱりこれはファンタジーで、異世界トリップってことなんだろうか？

わたしが言葉を失っていると、美形は「答える」と厳しく言ってきた。

目の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から来ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本を通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じゃなければだけど。

「産業が工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています」

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻ってる。それでも通じないのか。

やっぱりここは、考えたくないけど異世界なんだろうか？

「……恐れながら」

今まで気がつかなかったけど、近くには五十代くらいのおじさんがいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だったかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぼかんとしてしまっただ。

……そうすると、その最強の女魔術師って、日本人なの？

「……そうか。異世界召喚だというなら、こつも自然に言葉が通じるのは疑問だったが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなければなと呟いた。

「……あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。……おまえはまったく行ったことのない大陸で話を通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまっただ。

アメリカに行って、日本語が通じないのと一緒だ。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他の大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

……でも、なんで召喚されたのがわたし？

こんな枯れた地味女じゃなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「……しかし、召喚されてきたのは分かったが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい!？」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまっただ。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだったのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるって……、再発行してもらえばいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもらうわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだった。

「す、す、すみません！」

これって、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃったってことだよな。

わたしは頭を下げて美形に謝ったけど、こんなことでは許してもらえないだろうな。どうしよう。

ちろりと美形を覗くと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言ったことで、わたしは許してもらえたのかと思って頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思ってもいなかった彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれってなんなんだ！

「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まっていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

この人がせつぱ詰まっていることは感じられたけど、やっぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそうだし、女の子もよりどりみどりそうなのに。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が気の毒だ」

はい？ この人今、姫って言った？

姫って、貴族とか王族の女の人だよな？

……そんな人を花嫁に出来る目の前のこの美形はいつたい何者なんだ。

「姫って……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィだ」

「ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなってくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……って、国王なんですか!？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかった。

だって、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれって言われてるってことじゃない!

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたってこと!?

是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃったり、最悪の場合、国家同士の繋がりのお金を駄目にしたってことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによってわたしはそんな人の結婚を滅茶
苦茶にしちゃったんだよーっ！

003 とりあえず着替える

「お願いです。どうか殺さないでください」

「……俺は、なにもそんなことは一言も言っていないぞ」

わたしが王様に必死になって頼むと、彼は啞然とした顔になった。

「……あれ、違うの？」

いや、だってさ。

わたしはこの婚礼の契約で生まれるはずだった国と国の利益をぶち壊したんだから、展開的にはその場で殺されてもおかしくない立場だ。

だったら、全くその可能性がないとは言えないじゃない。

「でもわたし、大事な契約書を駄目にしてしまったし」

「だから、おまえが代わりに俺の花嫁になれと言っているだろうが」

わたしの言葉に対して、カレヴィ王は面倒くさそうに答えた。

いや、でもそれはいくらなんでも投げやりすぎない？

こんな地味で、政略的価値もないわたしを花嫁になんて、きつと

国民も納得しないよ。

「国王の花嫁なんてわたしには無理ですって！」

それにわたしには王妃にふさわしい気品もなにもない。むしろがさつという言葉がふさわしい。

わたしは必死で訴えたけど、カレヴィ王の反応は冷たかった。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「えええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般庶民のわたしには、王様の伴侶なんて重すぎる。

それにわたしは美人でもなんでもないし。

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「その格好を今すぐどうにかしろ」

王様にどうにかしろと言われて、わたしはとりあえずこちらの衣装に着替えることになった。

それに当たって、わたしはお風呂に入れてもらうことになってしまった。

そしたら侍女の一人に大事に持っていた原稿一式を奪われて、わたしはちよつと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ぜつたい、絶対だよ!!」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていたけれど、間違えて捨てられでもしたら困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるといふピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまったものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になって一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。

ちよつとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなつたわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へ移動すると彼女達は一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええつ、ちょっと、ちょっと！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまった。

……なんというかちょっと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

シャワーで全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がったら、侍女の一人に台の上へ横になってくださいと言われて、すでにやけくそになっていたわたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちょっと酷いんだよね、と言ったらそこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

さっきまでの羞恥もどこへやらで、わたしはご満悦になる。

そうしている間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪

磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、エステってこんななのかなあ。

まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといつてもタダだし。……ここが異世界ってんじゃないなら、もつといいんだけどね。

「それにしても、大きいのに形のよい素敵なお胸ですのね」

侍女の一人が感心したように言う。

うん、その点だけはみんなに褒められるよ。ありがとう。

「それに色白で、肌のきめも細やかで素晴らしいですわ」

まあ、日本人としては確かに白い方だけど、ここには白人の侍女もいるし、これはお世辞だろうなあ。

それに、肌のきめ云々はわたしにはよく分からない。みんなこんなものじゃないの？

全身マッサージも終わって、ちょっと休憩と言うことで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか？

もうちょっと地味な素材はないの？ せめて着る人に衣装は合わせたい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。ちえっ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……っ！か、これを着るのか？ 普段ダラケきつた生活をしているこのわたしが？

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでそうするわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だったけど、それはなんとか帯を巻いてしのい

だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

ここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあっ、ハルカ様、とってもお美しいですわー」

「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせずに冷静だった。

確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。

さっきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。

だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまたカレヴィ王の前に連れて行かれた。

004 超非凡な友人

着替えさせられたわたしは、さつきカレヴィ王がいた部屋へ戻らされた。侍女が言うにはそこは王の執務室らしい。

入室すると、そこに見知った人物がいたのでわたしはびっくりした。

だって彼女がここにいるはずない。思わずわたしは自分の目を疑った。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になっているけど、でもやっぱり間違いない。

「ち、千花っ！？」

「はるか、ひさしぶりー。元気だったー？」

幼なじみの千花に抱きつかれてわたしはちよつと呆然とする。

千花とは小さい頃からの友達だけど、こんなことは聞いてない。まさに青天の霹靂だ。

「げ、元氣、元氣だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

今は確か、結婚して外国にいるって聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だって聞いてなかった？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だっていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うっそ、そんなことありなの？」

千花、いつの間にかそんなことになったんだ。

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思うけどー……」

千花はそう言うと、困ったように頬に手をやった。なんとというか、どこことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだったのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きにして見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思っただら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花はわたしから離れると、カレヴィ王とおじさんに頭を下げる。「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルディアに睨まれてしまいます」

おじさんがどことなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……

まあ、千花は友達の鼻肩目を引いてもとっても美人なだけだね。

「……それにしてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

綺麗な響きだけど、やっぱり聞き慣れないせいかな違和感がある。

「うん、この大陸の人には千花って発音しにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごくない？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。

「うーん、はるかにはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思う」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言うんだから、事実なんだろう。

でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。

向こうの世界ではそれでも珍しいことだもの。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィ王が遠慮がちにわたし達の話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だっというのに堂々としている。ひよっとして、最強と言われるほどの魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだろうか。

さっきのおじさんもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでたし。

すごい。すごいよ、千花。

わたしなんか、王様と向き合うのでさえ、命の危険まで感じて内心冷や汗ものだったのに。

千花のこの肝の据わり方はマジでただ者じゃないよ。

「ハルカが突然現れたことで、隣国のディアルスタン王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になった。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

あ、そうだった。

千花がどうにか出来るならわたしのしたことは不問になるよね。

そしたら、王様と結婚しなくてもいいし。

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりません、ディアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしということになります」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまっている。どうしたらいい」
ええ、そんなにせっぱ詰まっているの？

だから、わたしを代役にしようとしたんだ。

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込む。

その次に、千花の爆弾発言が投下された。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になってもらうことになりますね」

「ああ、それでいい」

えええええっ!?!?

カレヴィ王は簡単に頷いてるけど、ちょっと待ってよ、わたしはそんなこと納得してない！

わたしは驚いて思わず飛び上がったしまった。

「えええ、千花ちよっと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこうなったんじゃない。

わたしは千花に縋りついて抗議する。

「うん、本当にごめんね。でも、カレヴィ王に酷いことはさせないって約束する」

それって、結婚しても手は出させないってことだよな？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやってるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよな。それは残念ながらやめることになりそうだけど……」

それを聞いて、わたしは少なからずショックを受ける。

あああ、わたしの楽しい貯蓄生活が遠くなっていく……。

「そんなあ……。わたし、せっせと貯めた預金を確認するのが楽しみなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはその事務員ってことにするよ。給料も今よりはるむし」

「ええっ、本当!？」

思ってもいない千花の言葉に、わたしは色めきたってしまった。

なんだ、そんなんだったら大歓迎だ。

それにしても、魔術師ってそんなことまで出来ちゃうの？

っていうか、会社設立って、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする?」

千花にそう言われて、わたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。「ええー、それなら結婚する!」

こんな素晴らしい機会を見逃すなんてこと、わたしには出来っこない。……ああ、この先には充実した生活が待っているんだね。

訪れるだろう近い未来を予想して、うっとりするわたしをカレヴイ王とおじさんが呆れた顔で見えていたけど、わたしはそんなことに構ってなかった。

……多少問題ありだけど、趣味に浸れるってすごく素敵じゃない？

005 子を成す覚悟

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はっと我に返ったように言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないですし……。その件については、わたしがどうにかしますから、カレヴィ王はもう少しお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。
うん、でもまあ、カレヴィ王が言ったことはごく当たり前のことなんだよね。

形だけの王妃なんて、もらっても困るだけだろう。
そしたら、わたしはおいしいだけの話に食らいついてちゃ駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」
わたしが決意表明すると、千花は驚いたように瞳を見開いた。

「え……、はるか、本当にいいの？　もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もそんな可能性が高い。

……だったら、別にカレヴィ王とそうなっちゃってもいいんじゃないかなって思うんだ。

わたしのその言葉に、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からない感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてると思ってるかもしれない。

まあ、成り行きつちや成り行きだけど、結婚するんだつたら、こ
っちもそれ相応の義務を果たさなければ駄目だよな。

「はるかがOKなら、わたしが口を挟むことじゃないよね。……で
も、なにか困ったことがあったらすぐに言ってよ？ 出来るだけ協
力するから」

千花がわたしの手を取って、それでも心配そうに言ってくる。

うん、持つべきものはやっぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくてもいいや。……
今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィ王がそこに割り
込んできた。

「……話は済んだか？ ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かつ
たぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言うと、カレヴィ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？ てつきり二十歳そこそこか……」

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じゃ嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知っているんじゃないのか？ 王妃になる
なら、清らかでなければならぬぞ」

うんまあ、そう思うのが普通だよな。

「ああ、それはないですから。わたしはとつても清らかですよ。
なんととっても、わたしはもてない女ですから」

だから、その点だけは胸を張って言える。

そしたら、わたしは事実を述べただけなのに、三人にもものすごく
微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そうか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳とい
うことにさせてもらおう。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思うけど、王妃にするにはこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言ってた男を知っている云々と言ってくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願いします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対して敬語もいらない」

今まで気が付かなかつたけど、この王様はかなり気さくらしい。

この先の人生、ずっと付き合っていかなくちやならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかった。

わたしはほっとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かった。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがな」
う、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。

「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ〜っ」

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ」

「ごめん、こればかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

王妃になるなら、それなりの気品を要求されることになるだろうから、たぶんその礼儀作法の授業は厳しいんだろうなあ。

……やっぱり、そうそうつまい話は転がってないよね……。

そう考えながら深く溜息をついているわたしにカレヴィが言った。
きた。

「取り急ぎおまえとの婚約の書類を作成するから、ハルカはそれに署名しろ」

「うん」

カレヴィからしたら、善は急げってことなんだろうなあ。

カレヴィがさらさらと書いた『両名は婚約の契約をする事に合意した』という文面に、わたしは彼のサインのあとに名前を書いた。

「これで契約成立だな。ハルカ、おまえも慣れない環境で大変だとは思うが頑張れ」

「うん」

いきあたりばったりの政略結婚だというのに、わたしの心配までしてくれて、カレヴィなんだかかんだ言ってもいい人だなあ。

……うん、この人とならうまくやっていけるかもしれないなど、わたしは少しだけ安心した。

婚約も決まったことだし、わたしは婚礼までに王妃らしく見える礼儀作法やこの国の歴史なんかを勉強しなきゃいけないから、これから大忙しだ。

……漫画描いてる暇あるかなあ。あるといいけど。

「話がまとまったのなら、ハルカに俺の血縁の者を紹介したいが、あいにく父母は諸国を旅している。連絡は入れておくから、まあその内帰ってはくるだろう。後で弟を紹介する」

とりあえず今すぐ先王陛下や王太后陛下にお会いする訳ではないらしいと分かって、心の準備がまだできていなかったわたしはちょっとほっとした。

「ハルカが心配することはなにもないよ。お二人とも気さくな方だし」

千花がわたしの心配を察したかのように、フォローしてきた。

そうか、それならちよっと安心した。

でも一人、会わなきゃいけない方が残ってるんだよね。

「……王弟殿下はどういう方なの？」

「シルヴィは今年十六になった。少し気難しいところもあるが、まあハルカが心配することはない」

……でも、一応近い血縁なら、わたしの歳のこととか言わなきゃいけないんだろうなあ。

それを若い殿下がなんと受け取るか、ちよっと心配だ。なんでも気難しいって言うし。

「ゼシリア、シルヴィを呼んでこい。こういうのは早い方がいいからな」

「かしこまりました」

いつのまにか控えていた地位のありそうな年かさの侍女がスカートを摘んでお辞儀をする。そして、王弟殿下を呼びに出ていってし

まった。

うわあああ、こ、心の準備が！

なんだか急に心臓がバクバクしてきたよ。

わたしが胸を押さえて深呼吸していると、それがおかしかったのか、カレヴィが笑った。

「そんなに堅くなるな。ティカ殿も言ったが、おまえはなにも心配することはない。未来の王妃として堂々としていればいいんだからな」

堂々つて……、ついさつき決まったことなのに、そんな無茶な。

わたしが不安な面もちでカレヴィを見ていると、彼はわたしの頭を撫でてきた。

……一応、わたしはカレヴィよりも年上なんだけど……。

そんなことを思っているうちに、ゼシリアと呼ばれた侍女が戻ってきて、程なくシルヴィ殿下がお越しになります、と伝えてきた。

このゼシリアという人、結構地位がありそうだと思ったら、侍女長なんだって。

なるほど、どうりで妙な威厳があると思った。

それからすぐに、シルヴィ王弟殿下が来られたということ、わたしは一気に緊張してしまった。

執務室に入ってきた人は、カレヴィと同じ銀髪と彼よりもやや薄い青い瞳の持ち主の少年というか、青年だった。

褐色の肌のカレヴィと比べて、色素は薄いらしく色白だ。

「お呼びですか、兄王」

十六という年齢にそぐわず、シルヴィ殿下はなんだかしつかりした印象を受ける。

後で知ったことなんだけど、この大陸では十五で成人と見なされるらしい。

「ああ。この度、俺の婚約者となった娘をおまえに紹介したいと思つてな」

カレヴィの言葉に、シルヴィ殿下は瞳を見開いた。

それに構わず、カレヴィは続けた。

「名はハルカ・タダノ。歳は二十歳ということにしてあるが、実は二十七だ」

わたしの実際の歳を聞いて、殿下は黙っていられなかったらしく、少々怒りを含んだ口調で言ってきた。

「兄王、婚礼を挙げる予定だったのは、ディアルスタンの王女では？ この方は他の大陸の方に見受けられますが。それに王の花嫁が二十七とはどういうことです」

確かに、彼の憤りは分かる。

それも兄の相手がこんな冴えない女なんだから。

「ディアルスタンとの縁談は残念ながら破談となった。……だが、このハルカはティカ殿の友人だぞ。王妃とするのに不足はあるまい」
「ティカ殿の……」

そこでシルヴィ殿下が千花の顔をまじまじと見つめた。

それに対して、千花はなんだか気乗りしなさそうに頷いている。

……ああ、そうか。

それでわたしは気がついてしまった。

わたしを王妃にとカレヴィが言ったのは、最初は腹立ち紛れからだったからかもしれない。けれど、途中でわたしとの結婚に乗り気になったみたいなのは、わたしが千花と友達だったからなんだ。

たぶん、わたしがカレヴィと婚礼を挙げれば、千花はわたしのために最強の女魔術師としてこの国に協力することになるのだろう。

……そっか。

別にわたし自身が必要とされてる訳じゃないと分かってしまっただけで、わたしはなんだかがっかりしてしまっただけ。

そりゃそうだよ。

わたしには王妃にふさわしい美貌も気品も教養もないもの。でも、元々が喪女だったわたしだ。

わたし自身に期待されないことは慣れきっている。

それでなんとかわたしは気力を持ち直すと、笑顔でシルヴィ殿下に手を差し出した。

「はるかです。よろしくお願ひします、殿下」

こっちの礼儀作法はよく知らないので、彼に笑顔で握手を求めると、困惑しながらも殿下は素直にわたしの手を握り返してきた。

「それとわたしはとうが立ってますが、一応清らかなので王妃となるのは大丈夫ですよ。わたしはこれまで男性にもてなくて恋人もいませんでしたから」

それを聞いて、シルヴィ殿下がなんとも言えない顔をした。

あれ、わたしまた変なこと言ったかなあ。

そしたら、カレヴィが渋い顔をしてわたしに言ってきた。

「ハルカ、そんな余計なことは言わなくていい」

「え、そう？ 結構重要な事実だと思うんだけど」

わたしがカレヴィにそう言っていると、シルヴィ殿下は困惑したように言った。

「そ、そうですか。それでは俺のことはシルヴィと呼んでください。それから、あなたの義弟になるわけですから、兄王より丁寧な言葉遣いでは困ります」

「あ、そうだね」

彼の言うことももっともなので、わたしはあっさりいつもの言葉遣いになる。

……じゃあ、お言葉に甘えて、彼のことはシルヴィと呼ばせてもらおう。

「それじゃ、よろしくねシルヴィ」

わたしがにつこり笑うと、それまでいくらかうるたえていた彼がほっとしたように笑った。

……うーん、可愛いな。

実はわたし弟が欲しかったんだ。

彼とは仲良くなれるように、暇を見て時々会いに行こう。

そんなことを考えて、にこにこしているわたしに、カレヴィがい

かなりの爆弾発言を発してきた。

「それでだな。拳式の予定だが、一ヶ月後とすることにした」
ええっ、それっていくらなんでも早すぎない？

礼儀作法のこともあることだし、せめて三ヶ月は余裕を見てほしいんだけど。

でも、国民に近々拳式するってことを知らせてあるんじゃないやっぱ
り駄目なのかなあ。

……やっぱり、わたしうまい話に食いつきすぎたかもしれない。
などと思っても、後悔先に立たず。

ちょっと心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはひきつり
笑いをしていた。

007 カレヴィ突撃？

「そんなに早く？ ちょっと早すぎない？」

この奇妙な状況を両親に説明して、会社も辞めなきゃならないわたしはカレヴィに食い下がった。

「……なにか困ることでもあるのか？」

カレヴィが眉を上げて見てきたので、わたしは素直に伝えた。

「会社をすぐに辞められるか分からないし、そんなに急に王妃になるのも、わたし自信ない」

できれば円満退社にしたいし、一ヶ月やそこらで礼儀作法が身に付くとは到底思えない。

「はるかの不安は分かるよ。準備するにもちよつと期間が短すぎるものね。……カレヴィ王、その辺りはどうにかならないのですか？」

わたしのこぼした不安に千花は頷いた後、カレヴィに交渉してくれる。

「期間が短いことは分かっている。だが、国民に婚礼が間近にあることを知らせてしまっている以上、なるべくなら日程は変更したくない」

「……そっか、そうだよな」

カレヴィにはつきりと断られてしまつて、わたしはちよつとがっかり。やっぱり駄目かあ。

「悪いが、式は予定通り行く。なんならおまえの勤め先には俺から説明するが」

「え……」

カレヴィの思つてもみなかつた申し出にわたしは目を見開いた。

いやでも、みんなにカレヴィなんて言つて説明するの？ 真実を正直に話したら正気を疑われかねないし。

「でも本当のことを話すわけにはいかないでしょ？ そこはうまく脚色しとかないと。それにカレヴィ、向こうのこと全然知らないで

しよ？ そんなんでうちの上司説得するとか無理があるんじゃないかな」

わたしがそう言うと、ちょっとカレヴィはむっとした。

「ありや、機嫌をそこねちゃったかな。」

カレヴィが好意で言ってくれてるのはよく分かるし、それはすぐありがたいよ。

せっかくこう言ってくれてるのに悪いけど、でもカレヴィを職場に連れていくのはやっぱりやめた方がいいかもしれないと思うんだ。千花はそんなわたし達の様子を窺いながら顎に指を当ててなにかを考えているようだった。そして、おもむろに口を開いた。

「それなら、わたしも付いていってその都度カレヴィ王に遠くから指示することにすればいいんじゃないかな？」

「おお、それはいいアイデアだ。千花、ナイス。」

カレヴィもそれはわたしと同じだったみたいで、納得したように頷いた。

「それはいい考えだな。ティカ殿、ぜひ頼む」

……となると、カレヴィを職場に連れて行かなきゃいけないんだよね。

「うーん、でもそれって、わたしこんなイケメンと結婚するんです！ ってみんなに見せることになるんだよね。」

今までもてなかつたわたしが突然イケメンを連れていったらどうなるか、想像しただけでも恐ろしい。

できればカレヴィが出てこない方向で、上司にわたしの退職を納得させたいけど、たぶん無理だろうなあ……。

そう考えてわたしがちょっと息をついていると、カレヴィがわたしの肩を励ますように軽く叩いた。

「そういうことだから、ハルカは安心していい。ティカ殿の協力もあることだしな」

わたしの溜息を不安感からのものと勘違いしたらしいカレヴィは笑顔で言ってくる。

「う、うん」

仕方なくわたしが頷くと、それまで黙っていたシルヴィも後押しするように言った。

「兄王がこう言っているのです。ハルカはもう少し気持ちをゆったりと持って兄王に任せておけばいいんですよ」

「う、うん……」

未来の義弟にまでこう言われちゃもう反論の余地もない。わたしはまた頷いた。

ああ、できれば穏便にことが済めばいいなあ、とか思ってたけど、これはちよつと無理っばい。

けど、自分で決めたことだから仕方ない。

千花もわたしのために動いてくれることだし、ここは頑張ろう。

とりあえず、その前に両親にカレヴィとの結婚を知らせる難題が待ち受けているけどね。

そして、カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言っても間に共同スペースみたいなものがあって、王と妃が一緒に過ごすときはそこを使うらしい。

この大陸ではどこの国の王宮もこの作りだと千花に教わった。

千花はその能力でいろんな国に行っているらしく、この世界のことを知るに当たって、すごくいい先生だ。

「はるか、今日は積もる話があるから泊まっていきたいんだけどいい？」

千花がそう言ってきたのをわたしは喜んで受け入れた。

ああ、ひさしぶりに千花とお泊まりかあ。千花のこれまでの生活のことも聞きたいし、すごくわくわくする。

すると、なぜかカレヴィが渋ってきた。

「なにも俺の婚約者になった今日でなくともいいだろう。ティカ殿

とは別の機会に……」

「カレヴィとはまだ結婚してるわけじゃないんだからそのくらいいいじゃない。本当に千花とは久しぶりに会ったんだから、たくさん話したいことあるし」

「しかし、今夜は……」

そう口を挟んできたシルヴィをカレヴィが片手で押しとどめると、仕方なさそうに溜息をついた。

「仕方ない、今夜だけだぞ」

「あ、ありがと。それで、明日は次の日に会社に行くから家に泊まるね」

そう言ったら、なぜかカレヴィがひきつったような顔をした。そして、それをシルヴィが気遣うように見ている。

あれ、なんかまずいことでもあるのかな？

「……どうかした？」

千花もそんな二人の様子を不思議そうに見ている。

「いや、なんでもない。明後日にはハルカはこちらに住むということとで間違いないんだな？」

「うん」

……まあ、会社の上司の説得がうまく行けばの話だけど。

とは、思ってもわたしは口に出さなかった。

それを言ったら、千花のお泊まりがなくなりそうな予感がしたからだ。

カレヴィ達の様子はちょっと気にはなったけど、わたしは目の前の千花とおしゃべりのことで頭がいっぱいで、すぐにそれを忘れた。

……ああ、本当に楽しみなあ。

これから気の重い両親と職場の説得が待ち受けているんだし、とりあえず楽しいことで気を紛らわそう、うん。

それでわたしは今、わたしにあてがわれた寝室に千花といた。
で、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上に
座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにしている、友達のわたしでも惚れ惚れする。

出るところは出て、手足は細くて長いっていいなあ。格好いい。

「……まず、はるかに謝らなきゃいけないことがあるんだ」

千花が改まってわたしに向き合ってきたので、わたしはちょっと
うろたえる。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていうのは実は嘘なの。わたしは、
わざとあそこにはるかが現れるようにし向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとわたしとカレヴィが結婚するようにし向けたってこと？

「本当にごめんなさい！」

千花はベッドの上で土下座する。対するわたしは信じられない事実に呆然としているだけだった。

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィ王と結婚する予定だったディアルスタンのリリーマ
リー王女は既に想い人がいたの。それは王女の守護騎士なんだけど」

なになに、王女と騎士の恋！？

それに対するわたしの反応は素早かった。なにを隠そう、今わたしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にもすごく興味を引かれてしまった。

「詳しく聞かせて」

わたしは千花に詰め寄って肩をがしつと掴むと、目を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらもちゃんと説明してくれた。

「王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想っていてね。そのうちディアルスタン国王に思い切って結婚したいと申し出るつもりだったらしいの」

「あらー……」

わたしは思わず気の抜けた声を出してしまった。

だって、それじゃカレヴィ、思い切り邪魔者じゃない。

物語的にはおいしいけど、ディアルスタンの王女と騎士はさぞ焦っただろう。

下手したらそれって、二人の愛の逃避行フラグだよ。

「でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかったから、王女とカレヴィ王との婚約話を進めちゃったのよね。カレヴィ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせっつかれて、そろそろ結婚しないとまずいと思っただらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」「政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろって言うてくるくらいだもんね。それくらい平気でするよね」

まあ、あの時のカレヴィは、ほとんど決まりかけていた婚礼を目前で駄目にされて頭にきてたんだらうけど。

それにしても、カレヴィは王女がどんな人物でも一向に構わなかったってことか。わたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

……けど、王なんだから、結婚するに当たって相手のこと少しく

らい調べない？

そうすれば、王女とその騎士が恋仲なくらい分かりそうなものだけだ。

そしたら、さすがにカレヴィもリリーマリー王女と婚約しようとはしないはずだ。

「それで今回、リリーマリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思つてただけど、婚礼契約書にカレヴィ王がサインしなければこの結婚は成立しないことになるのよね。それで、そこに目を付けたの」

「……それはわかつたけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」「突然召喚されてきたことにすれば、契約書が滅茶苦茶になつても不自然じゃないかなと思つて。それにはるかなら、カレヴィ王とうまくいくかもしれないなつて思つたし」

「ええっ？ 千花、なに言つてるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。わたしとカレヴィならうまくいくかもつてなんだ。仮にもカレヴィは王様で、わたしはただの一般庶民（それも喪女）だぞ。

悪いけど、それは千花の思い違いじゃない？

「二人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじゃない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思つたし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持つてないけどね。千花、鋭すぎる。

「でも、本当にカレヴィ王に手を出させるつもりはなかつたんだよ？ それだけは信じて」

まあ、それだとカレヴィが可哀想すぎる気もしたけど、最強である千花なら可能なんだろうな。

「うん、分かつてる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言つと、千花はちよつとうるたえた。……凶星かあ。

確かにわたしも一生一人でも別にいいと思っただけだね。

そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちょっと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じゃないから。はるかが不幸になることはないと思っただ。本当にごめんね、はるか」
そう言つと、もう一度千花は深々と頭を下げた。

「別にいいよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かったし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑つて言つと、千花は安心したように息をついて、「うん」と頷いた。

千花によると、わたしとカレヴィがある程度打ち解け、お互いに信頼関係が築けたところで本当の意味での結婚生活を送ってもらう計画だったそうだ。

でも、どうしても反りが合わなそうだったら、婚約話を白紙に戻すつもりだったとも言っていた。

「……でもそれだと、わたしに話が有利すぎない？ なんだかカレヴィがいいように利用されてるみたいでちょっと可哀想な気がする。カレヴィも、わたしを娶ることで千花の力を借りようっていうんだからお互い様かもしれないけどさ。

でも千花のわたしに対する気遣いは、わたしの「子供産んでもいいよ」発言で無になってしまったわけだけだ。

千花の気持ちは嬉しいけれど、やっぱりこういうのはフェアに行かないとね。

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これからのことを話していた。

「とりあえず、一回家に帰って事情を話しておきたいんだけど。会社にも辞めるって言わなきゃいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

千花がわたしの言葉に同調してくれたことで、わたしはちょっと癖のある両親の説得に千花という味方を得られて、かなり心強かった。

うちの両親は千花の言うことならたぶん信用するだろうし、それにいざというときには千花に魔法を披露してもらえばいいだろう。

「うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくって言ったら正気を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィは執務とかでいろいろ忙しいらしいんだけど、でもわざわざそう言うってくるのは、かなり気を遣ってくれてるんだろうな。

「どうしても必要だったら出てきてもらうかもしれないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらって理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかった娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだろうけど、そこは千花がいるし、大丈夫だよな。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたって訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたって言ったら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえなさそうな気がするの

は、わたしの気のせいだろうか。

なにしろ、わたしがもてなくて彼氏もいなかったことは職場に浸透しているしさ。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」

おお、力強いお言葉。カレヴィがそう言つと、なんとなく可能な気がしてくるから不思議だ。

「そう？　じゃあ、そうしようかな。カレヴィ、その時はお願いね」

「ああ、まかせておけ」

そう言つて爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいたのがわたしで、たまたま最強の魔術師の千花の友人だったからというの理解はしているけど。

でも感情面ではいかんともしがたく、なんとなくもやもやしつつも、わたしはとりあえず帰宅することにした。

009 おとんとおかん

千花の異世界移動魔法でこちらの世界の自分の部屋に移動してきたわたしは、まず適当な服を選んで着替えた。

昨日いなくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのに、いくら外見に頓着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替えてる間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替え終えたわたしは、家の鍵とバックを持って家の外に千花の魔法で移動した。

……家にいるのに、また外から入るってのも、なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど仕方ない。

おとんとおかんにはわたしが昨日いなくなってたのは分かっているだろうし、ちょっと情けないけどこれは苦肉の策だ。

「……ただいま」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛び出てきた。

「……はるか？」

おお、素早いな。……一応わたしのこと心配してくれてたんだらうか。

「連絡もしないで、今までどこ行ってたの。携帯は通じないし、まったくあんたって子は。頼みたい用事があったのに」

……なんだ、結局わたしよりもその用事の方が大事なのか。

おかんからのこういいう仕打ちは幼少から受けているけど、やっぱりちよつと落ち込む。

……まあ、いい加減、わたしもこういいう人なんだと理解して受け流せばいいんだけどね。

でも、理性では分かっているけど感情が付いていかないことであるでしょ？

それがまさにこの時プチ爆発して、わたしはむっとしてしまった。

おかんの上からの物言いにわたしが黙り込んでいると、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかはわたしの家に泊まってたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は結婚して外国に行っていることになってるからね。「まあ、千花ちゃん、また綺麗になって。いつ帰ってきたの？」

近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会って、おかんはころりと機嫌がよくなった。

「……ちよつと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる気もするけど。」

「つい、夕べです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃったんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしょうがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らうとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「さ、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよ！」とリビングに戻っていった。

「……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しすぎる。確かにわたしは出来の悪い娘だけさ。」

「……おばさん、なんとか相変わらずだね……」

千花が同情するように言ってきたのをわたしはただ苦笑いして受

け止めた。

改めて自分の評価を親に突きつけられた気がして、非常に情けなかった。

「……それにしても、ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかったね」

千花が眉を下げて申し訳なさそうにわたしに謝ってきた。

美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたように思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ」

……とはいえ、連絡の一つもすればよかったな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗だったなと思う。

まあ、過ぎてしまったことは仕方ない。次は気をつけよう。

「それより、千花上がってよ。千花には説明頑張ってもらわないといけないし」

そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上がると、わたしの後に付いてリビングに入った。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちょっと影の薄いおとんに笑顔で挨拶した。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。夕べははるかをお借りしちゃってすみませ

んでした」

「うん、いいんだよ。こういうことがないとはるかは家にひきこもってるんだから」

……おとももなにげに毒舌だよね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとんとおかんに外国での生活についていろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ」

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょうね。この不景気に冗談じゃないわよ」

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが口ごもると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。

「じ、実は今度、わたし結婚することになったんだ」

すると、おとんとおかんがうるんな目でわたしを見た。

……まあ、今まで男の影がなかったわたしの言うことを二人が信じられなくても仕方ない。

「本当です。あの変なことを言うと思われるでしょうけど、聞いてください。はるかには異世界の王様の花嫁になることになりました」

この近所の人の評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとんとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん？ どうしちゃったの？ はるかならともかく、千花ちゃんがそんなこと言うなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついてるぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔

術師をしています」

見てください、と千花は言うと、その手から明るい球体を出した。……もしかして、これが昨日千花が言っていたあかりを灯す魔法のかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになって見ている。

「……千花ちゃんは手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取っても不思議じゃない。

「違います。言うなれば、魔法使いですね。……よく見ててください」

千花はあかりの魔法を消してから椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぼかんとして見る、おとんとおかん。

……まあ、信じられなくても無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかった。

千花はまた瞬間的にテレビの傍からもう一度元の場所に戻ってくる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じった目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんが千花に事実を突きつけられても、まだ信じたくないというように呟いたけど、千花がそれに対して強く頷いて言った。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらっていいでしょうか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください」

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきゃ」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まり

を開始した。

二人は呆然として今は使いものにならないし、わたしが率先してやるしかない。

「おじさん、おばさん、信じられないかもしれませんが、これは本当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かつて右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返ったようだった。

すっかりよそ行きの格好になっている自分達におとんとおかんはうろたえた。

「こ、これはいったい……」

「千花ちゃん、どうなってるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいと狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、ここはどこだろう……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653ba/>

王様と喪女

2012年1月7日21時05分発行